

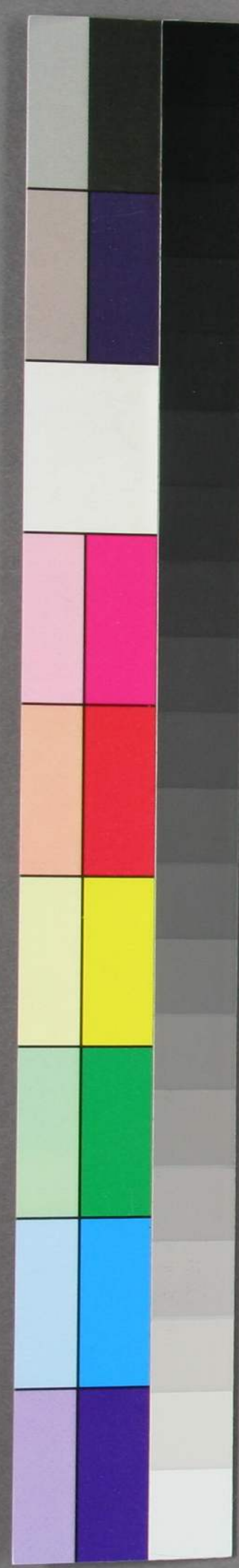
李合聚合傳記

聖
五
冊

79

1338

14



ヲ多9
1338
卷 14



む 東山殿の以志野宗信の家より好車の人
いし一の葦物合をのきりとおい歌合の元議判
よるまゝしておのし香のえをあるまゝに
たぐりて侍りしあるを世々名香合と
いし判者の牡丹花老人多菴肖柏ありしを
るし裏の竊し其式法を付けしはる大坊の

一本の沈水香菊をとりてあまのりより連歌よ
香をつけ下燵合香を催し歌合よ香を
附ては香合りぬ于後志野氏の名香合も
あり云々今予の香合よ歌を附るの本
及まはれ意あり 因よは流芳又曰か童のりてあま
は外香會り車とてまきおまらるるは是なり
此香をか童の歌いしめて取らる意を合ま
さく件の人として解まきよ及まらるるあふしり
てこのうららよ 到る先表書院の次の一間と

待合のやうよきつらひ床の軸の前大徳寺大綱
の書貴和の二字とらふおま余の具を並てりて
多き例の歌ものうらら香条の風流を聞
讀いとふゆやのうらら人と持まの香を包くが
終るまをきくむらぬ法のとて用意せり
之間よ上人よ香席の宝徳を辨せむ其
床を結紮を宮座よ中床かひとの賀成真圓
派澤月和歌懐紙花の糸尾をか巻よ入て床

付柱よりけり時代蔭繪の文臺より料紙硯と並
紅白の水引と載て軸肌より飾床の外より灰の棚
のあ半邊の真中より棚と並敷書棚方一尺高
一尺二寸けり桐白木機吹金黄糸白菊
花葉並上中辰棚及び蔭黄紙子の切張四方の
柱折付白と紫折深分のふさを上巻結より
下けり天井より青貝の香盒中辰より形物紐付
の炭圍箱並棚のあより素折乱箱と並乱箱の

中より前より青礫一重口三足の香爐右より古銅耳
付の第瓶より火筋香筋と揃り左より形物素
唐戸面紐付の重香盒より乱箱の左より小丸形
並地金存絵付火舎の火取と並敷書棚の左
より青貝の重硯より雲形短冊三折り敷書載て
銀の灰おしとあきへりして並より志野家より時より雲形
次の一間より屏風並宝珠右より右側より琉球風燈籠
と並炭圍とおし且後より火着環金よりよとて

く掃側は煙を敷て靴形の相益と出玉此を裁
々七種と云ふ秋草の花のうきまを畫して
裁しぬ客先くはありて花を賞せんは
宝禮己よりぬ客各掃側は牙り煙を喫し
花を賞せしむるくはありて各ういふ水にて
次牙は香席は着十日成正上香より次成章忠一
月將く列生より童舞の靴をよ
下をより香本の座は着香合式畢各香裏紙を取て
席と退次の間く會席料理有之

此時古莊楳谷尋至楳谷文士也上人先令雛僧
延坐別院送美行酒恐其供膳錯亂也楳谷
懽然獨酌吟哦自適遂作一詩曰西野秋涼至
探尋赴友朋酒清先見聖院靜未逢僧客
皆應接膝我已欲橫肱忽見香浮壁雜心傾
一層

會席早く茶かたき茶と點し且ふの探得
る香浴と題して張り詠を狎せ矣於終席は拘

つれ和歌會席の穂せのこころ、てよ至て楳舌
もま、膝と接し相共よ、以、河の真よ、今、楳舌を裁
の秋字とえて、よ、あ、歌

交りせよ、秋、う、あ、ぬ、萩す、ま、千草、花、ま、
也、へ、い、との、う、い、蓋、し、ち、め、て、わ、り、と、河、ま、り、各
其博雅と、ま、い、楳舌又、予、よ、題、と、こ、し、予、亦、の
一軸と、指、て、よ、是、い、ふ、團、風、古、字、の、中、真、実、を
録、し、真、実、の、真、蹟、澤、の、月、と、和、歌、ま、り、よ、い、ま、ち

澤月と、り、て、題、と、い、楳舌七言絶句の詩と、賦、て
日煙枯、風、死、浪、瑤、涼、忽、失、眸、中、一、釣、艘、唯、見、水、天
を、際、月、淡、描、サ、慶、房、落、秋、江、成、章、等、と、い、澤
月、ま、ま、房、れ、同、と、い、楳舌詩と、其、上、よ、題、せ、り
か、ら、い、ふ、ま、楳舌の病家の清と、得、て、う、言、一、座
和歌、ま、り、ぬ、お、よ、い、ふ、短、檠、と、酔、燭、と、ら、て、
各、歌、合、の、席、よ、着、け、い、い、う、判、者、と、て、上、座
ま、り、執、事、重、輝、此、い、い、る、の、乃、香、巾、の、座、よ、着

作法次第の記に、はああ、に披請言議記原判
同筆皆早のり、のせらる、たけき、し、す、り、
、お、と、し、く、ひ、な、ん、と、ま、ぬ、

花よりし月、あ、て、秋、は、い、あ、心、十、人
あ、ら、し、め、り、を、し、き、り、む、れ、つ、上、人、い、は、
、人、こ、と、を、ま、ま、す、を、あ、ら、す、ぬ、

天保十一年庚子の秋、美月十曾、香合并、香合、無、行
聖十音判の詞、言、つ、り、と、店、其、何、は、り、を、

き、お、い、ま、り、

墨香之中、真琴

床掛物

香席 鶴警六屈八畳中床

洒淨月和歌

真淵

きけはきしけ歌を

可きやく満るん歌

はそもの水の子ら歌

能都歳

不掛

何別氏時

香合記

香合記

香合記

香合記

香合記

香合記

一番

左薄紅葉 章一琴揮

成正

右窓乃月 正

成章

左の香は葉をばし一なるを不さかきまてあ
あしてらんゆきふいふきれと心を侍り右の
窓の月のますすきまに又中てり侍
と一番はたふれい方人と教あけ侍りや

二番

左 閨中燈 正章一琴

重輝

右 晚鐘 将

真琴

翠帳お軍の燈火のそと 後羅錦緞の袂よ
ふきうめらるるよをいよら 人よれぬ面影人多
かきかきふく人おえりし 右の晚鐘奥山寺
不あやよま深の袖よてあしる白
らもきふふと侍しとて方人よきくを侍し

三番

左 濱萩 将

忠一

右 錦木 正一輝

月将

大の濱萩 女人のまゝたれはる名も
かきかきふくをいよら 侍しとて
錦木のいよらも心もくてもまてかき
かきかきふくを侍しとて

四番

左 糸薄

正章

真琴

右 糸薄

将琴

重輝

秋のきまれば行の形も花のしほもささるるも
きこゆる之もくも不思議も侍のしほは
喬成童子のたよりをききしむる言儀一回
あつたふりしはまは打たれ下なるまわ
まゝいせもつて與あはれのうたもききし
こゝれと持ての今もなつかしきものなほく

トアノコ

五番

左 七女

忠一

右 小柴垣

正章一琴輝

月将

はなつとよもとの花やのよ立出るも
あつたふりしはまは打たれ下なるまわ
垣のしほもつての今もなつかしきものなほく
トアノコ

六番

大倉山 正将

成章

右将の病 章一琴輝

成正

大の香小倉山の京極黄門の山荘の閑寂あり
さほよかひしてかきりぬるまをいさしき右の
香茶の病とすしとるんやのぬるまをいさし
彼山荘の障子よあやけのけいけいきけお病
のこころよかよいなるまをいさしき

あやけのけいけいきけお病
のこころよかよいなるまをいさしき

(Faint bleed-through text from the reverse side)

六番歌合判象議

一番

左錦木 琴章一揮

月將

ふひんねとみけの跡を心まうとせつらうみさ

右系薄 將

成章

いづれふのまゝと玉ぬまゝとていとおもふ月の影

左錦木のまゝととやまゝいふまゝ好んで

うぬまゝあまぬととては侍の右の系薄を乃

三 白玉ぬまゝとて月の影をまゝとていふの今乃

うまゝぬまゝとていふ影の好んでいふ情をい

ていふまゝとていふ好んでいふまゝとて

定めていふ侍と錦木はたかきいふ

題より方人と扱ふまゝ侍れを例とせ

左と勝るん

二番

左小倉山 章一將

真琴

おんわ川月を流るる山をよきやきり小倉のえんおん

右京薄

忠一

しもきあうあを結入杖の飛りつよかぬ京すまらぬ
大月付るしよきさうのえんおん 右京の
しもきあうあを結入杖の飛りつよかぬ京すまらぬ
かきあはしおんおんおんおんおんおんおんおん
はしあうあを結入杖の飛りつよかぬ京すまらぬ

三番

左薄紅葉

重輝

秋の色をとやもえきあを結入杖の飛りつよかぬ京すまらぬ

右閨の燈

琴一将輝

成心

きみくやと待たふれたかけても心をきけし閨の火
おんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん
おんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん
おんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん

四番

左濱萩 正

忠一

あは波の音くまへて神風停智のまほ萩あき文々

右小柴垣 章一将

成正

世とよまゆ々々 高のふ家垣秋のあはれとあき山本
大濱萩の歌心こはさきあはして打きこり
きこるやけはまははせぬるまはたはけはる右の
歌又たのめをさうこちとつまうて老る子
あはまきこえけあへての中もこのつら

こを歌のまほとえるまはりへはれまき持
よやけけんたれと小柴垣あきまき人
おろくはり

五番

大晚鐘

成章

世の外つ秋のあはれまほまのへや 峯野ちけ入相のこ

右し女 正章一輝

月将

今いせくえのく残しのけまをけりし女の袖とまよ

